

Title	明治初期における「塾」の実態：東京の女子教育との関連で
Sub Title	On the realities of "private schools" at the early Meiji Period : in relation to the education of girls in Tokyo
Author	藤原, 敬子(Fujiwara, Keiko)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1980
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.20 (1980.), p.11- 21
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000020-0011

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治初期における「塾」の実態

—東京の女子教育との関連で—

On the Realities of “Private Schools” at the Early Meiji Period

—In Relation to the Education of Girls in Tokyo—

藤原敬子
Keiko Fujiwara

It is said that the modern school system in Japan was started by the impact of the 1872 educational decree which modelled after European school systems. This is also very important on the history of women's education because the decree declared in the preface that men and women must attend school.

Schools in Japan before 1872 were mainly consisted of the Shōheikō, fief schools and private schools. But most of these schools were opened only for men. Usually women of all classes were chiefly educated at home. From the late Tokugawa Period, however, with the development of commerce, Terakoya schools—a kind of private schools—increased to a great extent and we can find that many girls learned the three R's there. Especially, in the great cities, the number of girls attending Terakoya schools was very little below that of boys. There is a profound sense, therefore, in which the necessity of schooling of girls came to be recognized. It would be fair to say that these schools, if not of a school “system” itself, perhaps laid the groundwork for a modern education in terms of both quality and quantity.

Using the material of “Kaigaku Meisaisho”, this paper aims to analyze the realities of girls' education in Terakoya schools and the other private schools in Tokyo before enacting a new “School System”.

はじめに

我が国の近代公教育制度は、1872（明治5）年の「学制」によってスタートしたと言われている。近代以前の組織的・計画的な教育については、男子を対象としては、昌平坂学問所・藩校・私塾・寺子屋などの教育機関・施設が開かれていたけれども、女子を対象としては、元来家族制度の「家」観念に基づく伝統的な家庭教育が主とされていたのである。ところが、近世も末頃になると、女子も寺子屋・私塾などの教育機関・施設で学び始める動向が生じた。

「学制」は、西欧先進諸国の教育制度に範をもとめたものではあったが、すでに我が国には上記のような男女

を対象とした教育機関・施設の成立・普及という基盤があったからこそ、幾多の困難な状況下でありながらも、ともかく、ある程度の成果をあげたものと考えられるのである。本稿では、「学制」が男女ともに就学すべきことを定めており¹⁾、従って近代女子教育のスタートでもあるとされているところから、この点に注目して、「学制」前の近世的教育機関・施設での女子教育の実態と、この実態がその後の我が国の近代公教育に与えた影響について、その実相と意義の一端を明らかにすることに目的がある。そのためにここでは、特に、寺子屋その他への女子の就学が盛んであった東京を取りあげ²⁾、究明を試みたいと思う。

I. 主要資料と分析の方法

本稿で用いた主な資料は、都政史料館編『東京府開学明細書』全7冊(昭36~38年刊)である。従来、自然発生的であった寺子屋・私塾は、政府の統制下に入ることとなり⁸⁾、明治5年の「学制」によって、私学・私塾・家塾という呼称で民間開設の学校としての取扱いを受けることになった⁹⁾。そして、「学制」第43章、文部省布達第24号(明治5年9月附)により、私塾・私学の開業の願ある者は、地方庁を通じて文部省に届出、文部省が検査の上許可し、家塾については地方限りで許可することとした¹⁰⁾。これにもとづき、明治5年末から6年にかけて、東京府は開学願書を提出させるとともに、これと並行して開学明細調を行なった。この明細調の結果を収めたものが、本稿資料の『東京府開学明細書』である。ここには、東京府下の私学・私塾・家塾の所在地・塾名・塾主名・教師の性別・身分・経歴・学科・男女別生徒数・生徒年齢・教授書籍などが一塾ごとに記録されている。

また、それは一番から六番までの中学区に分かれて記載されており、資料分析において地域比較をするため、まず、各中学区の特徴を踏まえておく必要がある。この中学区は東京府が明治4年に決定した大区小区制度を準拠とし、6つの大区をそのまま6つの中学区に決めたものである¹¹⁾。各中学区の範囲・人口¹²⁾・職業分類比¹³⁾・店借率¹⁴⁾から次のような各中学区の特徴が見出せる。第一番中学区は、皇居の東方で日本橋・両国・神田にわたる地

域で、人口が171,590人(全中学区人口の21.6%)に達する。6中学区中最も人口の多い地域である。また、政治・経済・文化の中心地であり、他の中学区と比較して、官員・工・商・雇人が一番多く、農業人口が皆無という特徴を持っている。第二番中学区は、芝・高輪・麻布・目黒に広がる城南地域で、人口120,623人(15.2%)。商・雑業者が多く、店借率が二番目に高い。城西の第三番中学区には、赤坂・四谷・牛込の地域が含まれ、旧士族の居住地であり、職業別にみると雑業者が最も多い。人口106,554人(13.4%)。城北の第四番中学区は小石川・本郷・駒込・板橋・王子に広がる地域で、人口89,672人(11.3%)と6中学区中最も人口の少ない地域である。同じく城北の第五番中学区は浅草・上野・吉原を含み、人口167,849人(21.1%)である。これらの第四番・五番中学区は、農業従事者の比率がともに他の中学区より高いのが特徴である。本所・深川一帯の第六番中学区は、人口138,540人(17.4%)で、第四・第五番中学区に次いで農業従事者が多く、また店借率が最も高いことから都市の下層民が多い地域と考えられる。¹⁰⁾

塾の分類については、届出の頭書によって、家塾すなわち寺子屋、私塾すなわち寺子屋以外のものと分けることも可能であるが¹¹⁾、家塾にも洋学や医学を教授する塾も含まれていることから、ここでは学科目によって分類することにした。すなわち、筆道を中心とする寺子屋と専門的な学問技芸を教授することに重点を置いた私塾とである。寺子屋は、筆道の他に素読・算術をも教授する

第1表 教師別塾数と生徒別塾数

塾数 中学区	男教師 のみ	男女教師	女教師 のみ	男子生徒 のみ	女子生徒 のみ	男女共学	生徒ナン 不明	計
1	176	6	35	38	0	176	3	217
2	127	0	11	25	0	109	4	138
3	146	0	12	38	0	119	1	158
4	132	0	4	15	0	119	2	136
5	164	0	14	23	1	151	3	178
6	165	1	7	28	0	143	2	173
計	910	7	83	167	1	817	15	1,000

ところで、読書算を教授する所謂初等教育機関であり、教授書籍でみると、いろは、名頭、往来物、漢籍では、孝経・小学・四書・五経程度、算術では八算程度の教授を施すところである¹²⁾。私塾は、寺子屋以外の塾で、漢学・皇学・算学・洋学・医学などを教授するところである。

以上の前提的注記の上で、資料を教師・生徒・学習内容の三つの面から分析し、明治初期における従来からの教育機関（寺子屋・私塾）での女子教育の実態を調査する¹³⁾。

II. 教師について

教師については、本稿では、男教師・女教師と生徒との関係に主眼を置いて検討する¹⁴⁾。まず、全塾¹⁵⁾を男教師のみの塾、男女両教師のいる塾、女教師のみの塾に分類整記したものが第1表である。女教師のみの塾は全塾の8.3%と僅かではあるが、存在していることが注目される。また、全塾の内、男子生徒のみの塾は167塾、女子生徒のみの塾は1塾¹⁶⁾、男子生徒も女子生徒も学んでいる塾は817塾と、圧倒的に男女共学の塾¹⁷⁾が多い。

教師実数（第2表）からすると、女教師は全教師の7.7%である。地域別にみると、女教師92人の内42人が第一番中学区であり、ここには女教師の生まれる特別な社会的背景があったことが示唆されている。また、女教師の教授科目は80人が筆道のみであり、女教師の殆ど

が初歩的な学科を教えていたことがわかる。

第3表は、女教師に学ぶ男子生徒数と女子生徒数を示したものである。女教師は女子生徒のみでなく男子生徒も教えているが、女教師に学ぶ生徒は、やはり男子より

第2表 男女別教師数

教師数 中学区	男	女	計
1	211 (2)	42 (2)	253
2	201 (12)	12	213
3	166 (3)	12	178
4	151 (2)	4	155
5	202	14	216
1	173 (2)	8	181
計	(92.3%) 1,104 (2)	(7.7%) 92 (2)	(100%) 1,196

()は外人教師

第3表 女教師に学ぶ男子生徒数と女子生徒数

生徒 中学区	女教師塾に学ぶ生徒			男女教師塾に学ぶ生徒			総計
	男	女	計	男	女	計	
1	873	1,518	2,391	479	375	854	3,245
2	220	361	581	0	0	0	581
3	250	420	670	0	0	0	670
4	62	95	157	0	0	0	157
5	270	363	633	0	0	0	633
6	110	179	289	125	95	220	509
計	1,785	2,936	4,721	604	470	1,074	5,795

第4表 女教師と女子生徒

生徒数 中学区	女教師塾	男女教師塾	計	男教師塾	総計
1	1,518	375	(31.0%) 1,893	(69.0%) 4,223	(100%) 6,116
2	361	0	(14.7) 361	(85.3) 2,095	(100) 2,456
3	420	0	(19.1) 420	(80.9) 1,778	(100) 2,198
4	95	0	(4.9) 95	(95.1) 1,842	(100) 1,937
5	363	0	(11.4) 363	(88.6) 2,813	(100) 3,176
6	179	95	(9.1) 274	(90.9) 2,741	(100) 3,015
計	(15.5%) 2,936	(2.5%) 470	(18.0%) 3,406	(82.0%) 15,492	(100%) 18,893

第5表 女教師の身分

身分 中学区	士族	平民	雑業	商	外国人	無記入	計
1	2	11	5	2	2	20	(45.6%) 42
2	1	8	0	0	0	3	(13.1) 12
3	1	1	0	1	0	9	(13.1) 12
4	3	0	1	0	0	0	(4.3) 4
5	1	5	1	0	0	7	(15.2) 14
6	1	3	1	0	0	3	(8.7) 8
計	(9.8%) 9	(30.4%) 28	(8.7%) 8	(3.3%) 3	(2.2%) 2	(45.6%) 42	(100%) 92

も女子の方が多くなっている。女教師に学ぶ女子生徒は3,406人で男子生徒2,389人より1,017人も多い。さらに、地域別に検討すると、女教師塾に学ぶ生徒総数の内、男子生徒・女子生徒ともに第一番中学区が最も多く、50.6%に達している。

次に、女子生徒の就学と女教師との関係を見るために、女子生徒の内、女教師塾で学ぶ者・男女教師塾で学ぶ者・男教師塾で学ぶ者の数を調べ一覧表にした(第4表)。これによると女子生徒の内、第二番中学区から第六番中学区では、男教師塾に学ぶ者が80%以上であるのに対し、第一番中学区では69%に減少し、女教師に学ぶ者が31%と他の中学区より高い数値を示している。つまり、第一番中学区の女子生徒は、ほぼ3人に1人が女教師に習っていることになり、この中学区においては女子生徒の就学と女教師の間に深い関係があったように思われる。

女教師の身分は、平民¹⁸⁾が42.4%であり、次いで士族が9.8%で、平民が圧倒的に多い。

III. 生徒について

生徒については、六中学区を総括的な面からと地域的な面から見ていくことにする。

第6表は、6中学区全体の男子生徒・女子生徒を年齢

別に示したものである。まず、男子生徒数と女子生徒数を比較すると、寺子屋に学ぶ男子生徒は20,293人で、女子生徒は18,058人であり、男子100に対する女子の就学率は89.0%と非常に高い。この率は『日本教育史資料』からの算出の場合とほぼ一致する¹⁹⁾。私塾においては男子生徒6,737人、女子生徒636人であり、男子100に対する女子の就学率は9.4%と極めて低い。また、男子生徒の内、寺子屋に学ぶ者は75.1%、私塾に学ぶ者は24.9%と4人に1人が私塾に学んでいるのに対し、女子生徒の内96.6%が寺子屋に学んでおり、私塾で学ぶ者は3.4%にすぎない。以上のことから、女子には筆道を中心とする初歩的な教養のみが要求され、男子ほど高い知識・学問が要求されていなかったことが推察できる。

男子の生徒年齢と女子の生徒年齢を比較してみると、男子の場合6～9才が一番多く、次いで10～13才であるのに対し、女子の場合は6～9才よりも10～13才の方が多く、約半数の48.5%にも当たる。このことは、女子の方が男子よりも寺子屋に入って学び始めるのが遅かったという事実を反映しているものとも解される。ともかく、10～13才においては、寺子屋で女子生徒数が男子生徒数を上回っているのである。また、私塾においては、14才以上と年齢が高くなるにつれて男子生徒数は増加するが、女子生徒数は急減している。私塾においても、女子

第6表 男女別生徒数

生徒 年齢	男子生徒			女子生徒		
	寺子屋	私塾	計	寺子屋	私塾	計
6～9才	(47.5%) 9,641	(8.4%) 568	(37.8%) 10,209	(43.8%) 7,900	(32.4%) 206	(43.3%) 8,106
10～13	(40.6) 8,233	(17.4) 1,171	(34.8) 9,404	(48.7) 8,800	(42.5) 270	(48.5) 9,070
14～16	(6.9) 1,397	(16.4) 1,104	(9.3) 2,501	(7.9) 1,292	(16.5) 105	(7.5) 1,397
17～19	(1.9) 383	(17.2) 1,163	(5.8) 1,546	(0.2) 38	(4.4) 28	(0.4) 66
19～	(3.1) 639	(40.6) 2,731	(12.3) 3,370	(0.1) 28	(4.2) 27	(0.3) 55
計	(100) 20,293	(100) 6,737	(100) 27,030	(100) 18,058	(100) 636	(100) 18,694
百分比	(75.1%)	(24.9%)	(100%)	(96.6%)	(3.4%)	(100%)

第 7 表 寺子屋における各中学区の年齢別生徒数

() = %

中学区 年齢	男子生徒							女子生徒						
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	5	6	計
6~9 才	(53.2) 3,209	(51.6) 1,275	(35.1) 879	(43.2) 859	(48.3) 1,828	(45.3) 1,591	(47.5) 9,641	(48.4) 2,891	(44.6) 1,032	(34.4) 681	(38.6) 720	(43.4) 1,345	(43.8) 1,231	(43.8) 7,900
10~13	(36.4) 2,197	(38.8) 958	(43.4) 1,089	(47.3) 941	(38.7) 1,464	(45.1) 1,584	(40.6) 8,233	(45.0) 2,689	(46.6) 1,079	(52.6) 1,055	(52.7) 981	(50.7) 1,573	(50.7) 1,423	(48.7) 8,800
14~16	(5.8) 350	(6.3) 156	(13.1) 328	(6.6) 131	(5.4) 202	(6.5) 230	(6.9) 1,397	(6.3) 374	(8.6) 198	(12.0) 240	(8.4) 157	(5.6) 174	(5.3) 149	(7.2) 1,292
17~19	(1.5) 91	(1.2) 29	(4.0) 100	(1.4) 28	(2.7) 102	(0.9) 33	(1.9) 383	(0.2) 11	(0.2) 4	(0.6) 14	(0.2) 4	(0.1) 4	(0.04) 1	(0.2) 38
19~	(3.1) 184	(2.1) 51	(4.4) 111	(1.5) 29	(4.9) 187	(2.2) 77	(3.1) 639	(0.1) 6	(0) 0	(0.4) 10	(0.1) 2	(0.2) 6	(0.16) 4	(0.1) 28
計	(100) 6,031	(100) 2,469	(100) 2,507	(100) 1,988	(100) 3,783	(100) 3,515	(100) 20,293	(100) 5,971	(100) 2,313	(100) 2,000	(100) 1,864	(100) 3,102	(100) 2,808	(100) 18,058

第 8 表 私塾における各中学区の年齢別生徒数

() = %

中学区 年齢	男子生徒							女子生徒						
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	5	6	計
6~9 才	(5.6) 72	(4.8) 81	(9.8) 96	(10.6) 97	(6.1) 59	(18.4) 163	(8.4) 568	(16.9) 24	(35.5) 44	(26.7) 16	(38.7) 24	(10.0) 4	(45.2) 94	(32.4) 206
10~13	(15.8) 204	(12.3) 209	(20.8) 205	(19.2) 175	(18.3) 178	(22.6) 200	(17.4) 1,171	(38.7) 55	(39.6) 49	(45.0) 27	(45.2) 28	(40.0) 16	(45.7) 95	(42.5) 270
14~16	(16.9) 218	(15.9) 270	(17.1) 168	(17.0) 155	(17.7) 173	(13.5) 120	(16.4) 1,104	(24.0) 34	(16.9) 21	(21.6) 13	(12.9) 8	(32.5) 13	(7.7) 16	(16.5) 106
17~19	(17.2) 222	(25.1) 424	(11.9) 118	(19.5) 178	(14.7) 143	(8.8) 78	(17.2) 1,163	(9.9) 14	(3.2) 4	(1.7) 1	(3.2) 2	(15.0) 6	(0.5) 1	(4.4) 28
19~	(44.5) 573	(41.9) 709	(40.4) 397	(33.7) 307	(43.2) 420	(36.7) 325	(40.6) 2,731	(10.5) 15	(4.8) 6	(5.0) 3	(0) 0	(2.5) 1	(0.9) 2	(4.2) 27
計	(100) 1,289	(100) 1,693	(100) 984	(100) 912	(100) 973	(100) 886	(100) 6,737	(100) 142	(100) 124	(100) 60	(100) 62	(100) 40	(100) 208	(100) 636

は低い年齢で理解のできる初歩的な段階の学習に止まっていたようである。

次に、中学区ごとの地域的な面から検討してみる。まず、各中学区における年齢構成についてであるが、第7表は寺子屋における各中学区の生徒総数を100とし、各々の年齢層の示める割合を算出したものである。男子生徒については、第一番中学区と第二番中学区で6～9才の生徒数が50%以上であり、10～13才の生徒数より多くなっている²⁰⁾。女子生徒についても第一・二番中学区では6～9才の生徒が最も多いが、第三・四・五・六番中学区では10～13才の生徒の方が50%以上と多くなっている。つまり、商業地域の子供の方が農業従事者や旧士族の多い地域の子供より寺子屋で学び始めるのが早い傾向にあると言える。それだけ、商業地では読書算の必要性が高かったのであろう。また、旧士族の多い第三番中学区では、学び始めるのが遅いが、14才以上の高い年齢でも学んでいる生徒が多くなっているのが注目される。私塾における各中学区の年齢構成(第8表)では、男子生徒はどの中学区でも19才以上の高い年齢の者が最も多くなっているが、女子では寺子屋の場合と同様10～13才が最も多い。これは高度の専門的知識が女子には要求されていなかったからであろう。しかし、特に女子の場合、第一番中学区で他の中学区に比べ、17才以上の高い年齢の生徒が多く、6中学区中の17才以上の生徒の半数を占めている。政経文化の中心という社会的背景が、女子も専門的な知識を学ぶという傾向を高めていったものと考えられよう。

次に、各年齢層における地域比較をしてみる。第一番中学区から第六番中学区までの各年齢層での生徒数の合計を100として、各中学区の生徒の占める割合を算出したのが第9表である。私塾では特に目立つ点はないが、寺子屋の場合、特に、第一番中学区と他の中学区との間に明瞭な差が現われている。各中学区別の生徒総数を比較すると、男子・女子共に第一番中学区が30%を占めている。これは第一番中学区が6中学区中最も人口が多いから当然ではあるが、人口比21.6%より高いわけであるから、それだけ第一番中学区が他の中学区より就学が盛んであったと解せる。

以上、地域的な比較からすると政治文化の中心、商業地では、男子・女子共に就学が盛んで、しかも就学年齢も旧士族や農業従事者の多い地域よりも早いという事実が判明する。

私塾に学ぶ女子生徒数の少ないことは、すでに述べたが、私塾に学ぶ生徒は一体どのような私塾に学んだのであろうか。女子の学んだ私塾を内容別に、(A)漢学・皇学塾²¹⁾、(B)洋学のみ塾、(C)洋学と漢学・皇学または算術を合わせ教授する塾、(D)算術のみ²²⁾、その他²³⁾の塾の4つの型に分類した(第10表)。(A)の漢学・皇学塾に学ぶ女子生徒は人口の最も少ない第三番中学区・第四番中学区が最も多くなっている。これは、旧士族の多い地域や農業従事者の多い地域では新しい洋学よりも伝統的な漢学・皇学塾に行く傾向が強いことを示している。また、(B)の洋学のみ塾に学ぶ生徒は106人で女子生徒総数からすると少ないけれども、明治維新を契機とする文明開

第9表 寺子屋の各年齢層における学区別生徒比率

(%)

中学区 年齢	男子生徒							女子生徒						
	1	2	3	4	5	6	計	1	2	3	4	5	6	計
6～9才	33.1	13.2	9.1	8.9	19.0	16.5	100	36.6	13.1	8.6	9.1	17.0	15.6	100
10～13	26.7	11.6	13.2	11.5	17.8	19.2	100	30.6	12.2	12.0	11.1	17.9	16.2	100
14～16	25.1	11.2	23.5	9.4	14.4	16.4	100	29.0	15.3	18.6	12.1	13.5	11.5	100
17～19	23.8	7.6	26.1	7.3	26.6	8.6	100	28.9	10.5	36.8	10.5	10.5	2.6	100
19～	28.8	8.0	17.4	4.5	29.3	12.0	100	21.4	0	35.7	7.2	21.4	14.3	100
計	29.7	12.1	12.3	9.8	18.6	17.3	100	33.1	12.8	11.1	10.3	17.2	15.5	100

第10表 私塾類型と女子生徒

中学区		1	2	3	4	5	6	計
6 ~ 9才	A	9	0	12	20	3	12	56
	B	8	0	1	1	0	0	10
	C	7	43	3	3	1	82	139
	D	0	1	0	0	0	0	1
10 ~ 13	A	10	0	20	17	8	1	56
	B	34	0	5	2	5	0	46
	C	6	45	2	4	3	94	154
	D	5	4	0	5	0	0	14
14 ~ 16	A	5	3	5	2	4	1	20
	B	23	0	4	3	8	0	38
	C	6	14	2	3	1	14	40
	D	0	4	2	0	0	1	7
17 ~ 19	A	1	0	1	1	3	0	6
	B	6	0	0	0	0	0	6
	C	7	4	0	1	3	1	16
	D	0	0	0	0	0	0	0
19 ~	A	3	0	1	0	0	0	4
	B	6	0	0	0	0	0	6
	C	3	6	1	0	0	0	10
	D	3	0	1	0	1	2	7
小 計	A	28	3	39	40	18	14	142
	B	77	0	10	6	13	0	106
	C	29	112	8	11	8	191	359
	D	8	9	3	5	1	3	29
総計		(22.3%) 142	(19.5%) 124	(9.4%) 60	(9.8%) 62	(6.3%) 40	(32.7%) 208	(100%) 636

- A……漢学・皇学塾
 B……洋学のみ塾
 C……洋学と漢・皇学または算術の混合塾
 D……算術・その他の塾

化の息吹が感じられる²⁴⁾。また、これは第一番中学区で77人(洋学塾に学ぶ女子生徒総数の72.6%)と圧倒的に多く、商業地から、新しい学問である洋学に女子の目が向いていくということである。洋学の種類は英学が最も多く、次いで独学・仏学であり、その他の洋学はない²⁵⁾。

これらの私塾においては、男子生徒の中に女子が一人か、あるいは数名入って学ぶといったもので、女子のみを対象とした女子専用の私塾は殆どなかったと言える。

もっとも、僅かに二塾だけではあるが、女子のために

開かれた私塾がある。一つは、明治3年、桜田本郷町(第二番中学区)に創設されに水交女塾である。明治5年の「開学願書」に次のようにある。「……今般女学私塾相設度候得共未浅学ニ依而本意ヲ不遂候折柄幸静岡県士族小林省三女ま佐事願濟ニテ私方ニ寄留小女ト同志ニ付幼童ニ英学教導為致度……」とあり、女子の私塾であることがわかる。生徒数は女子14人、男子6人で、男子でも13才までなら入塾できた。学科目は英学の外に皇学・洋算・筆道とし、教授書籍は国学入門・孝経・国史略・日本外史・英学リードル・理学初歩・文典・地理書・歴

第11表 塾において採択された教材・教科書

塾教科	主な書籍名	1	2	3	4	5	6	計	その他の書籍名
		中学区 148塾	101	110	112	144	135	750	
消息	消息往来	63	40	40	66	61	44	314	手紙の文, 手習状, 尺素往来, 用文章, 風月往来, 花鳥往来, 初学文, 手紙案内文, 大和往来, 書札往来, 手紙證文, など
	庭訓往来	45	39	31	28	44	43	230	
	消息詞文	10	2	7	0	4	5	28	
	文之文	7	1	2	10	2	1	23	
教訓	実語教・童子教	7	8	11	6	11	27	70	幼童教草, 近道往来, 六論衍義大意, 世話字往来, 幼童早道往来, 童子教車, 父母始守るべき事, など
	謹身往来	6	8	10	11	7	8	56	
	今川	11	6	5	8	7	14	51	
歴史	千字文	12	13	14	10	9	15	73	皇国千字文, 本朝三字経, 弁慶状, 熊谷状, 大坂状, 曾我状, など
	古状揃	4	12	6	3	6	20	51	
地理	「東京」とつく書名	72	40	43	35	45	39	274	東京地名鑑, 東京町名盡, 東京地名往来, 東京名所記, 東京町名往来, 東京名産往来, 東京道しるべ, など
	東京方角	48	38	31	24	38	38	217	
	東京往来	8	2	3	5	7	1	26	
	(日本・大日本)国盡	70	43	36	31	52	42	274	万国国盡, 万国往来, 隅田川往来, 世界国名盡, 名物往来, 洛陽往来, 立田詣, 木曾路往来, 道中往来, 中仙道往来, 西上往来, 吾妻路往来, 都往来, 池上詣, など
	世界国盡	6	8	5	2	4	3	28	
	東海道(都路)往来	41	17	17	17	36	19	147	
江戸方角	6	2	2	1	1	0	12		
白遣往来	2	0	2	3	3	2	12		
産業	商売往来	79	49	40	50	58	46	322	世界商売往来, 諸職往来, 農業往来, 萬作往来, 奉公往来, 地方往来, 染物盡, 農工商諸道, など
	百姓往来	2	7	10	11	12	1	43	
	番匠往来	3	0	2	2	0	1	8	
社会	源氏(名寄)	8	3	6	5	2	4	28	要用往来, 御高礼御條目, 太政官日誌, 郡中御制法, 扇文章, など
	和漢朗詠	6	9	7	3	1	2	28	
	世話千字文	4	3	1	1	1	1	11	
女子用	女今川	10	4	4	2	2	6	28	女用文章, 女手習状, 女文之文, 女庭訓, 婚禮(女)国盡, 女東京往来, 女東京方角, 女江戸方角, 女孝経, 女小学, 女実語教, など
	女消息往来	9	0	3	2	3	2	19	
	女大文学	10	3	1	1	0	2	17	
	女国盡	7	0	2	2	1	2	14	

史・窮理書を挙げている。もう一つは、明治4年、神田に開かれた芳英社である。明治5年の「開学願書」に次のようにある。「女兒洋学取立方之儀奉願候書付、方今洋学御張皇之折柄兒女洋学舎開度志願ニ付……此度神田佐柄木町私拜借地ニ於婦人英学設立仕度……」とあり、明らかに女子のための英学塾であることがわかる。生徒数は57人でその内女子が56人で、男子は1人だけである。教授内容は、リートル・文典・万国史・米国史・地理書となっている²⁶⁾。

このように、女子を対象とした塾も少しではあるが出現しているのは注目に値する。

IV. 学習内容について

学習内容については、各塾ごとに教授書籍が記載されているので、主として教材の面から検討することにする。第11表は女子の学んでいる塾²⁷⁾において、使用された教授書籍を内容別に、消息・教訓・歴史・地理・産業・社会・女子用に関するものの七系列に分類したものである²⁸⁾。教授書籍は実に多種多様で、一塾でのみ用いられているものも多くあるが、本稿では紙面の都合上、使用数の多いものだけを取り上げることにする。

消息に関するものは、殆どすべての塾で用いられてい

る。これは当時、唯一のコミュニケーションの手段として手紙が重要な役割を果たしていたからであろう。よって、学習の初歩の段階で手紙の書き方を学ぶのであり、同時に手紙の内容から実用的な知識も養われることになる。『消息往来』と『庭訓往来』が圧倒的に多く、『消息往来』は314塾(全塾の41.9%)であり、『庭訓往来』は30.7%もの塾で用いられていた³⁰⁾。これらの往来は、ある地域で特に多く用いられたというのではなく、むしろ、地域・職業・身分を越えて、社会生活に必須のものとして学ばれたと言えるであろう。歴史に関するものについては、一番多く用いられている『千字文』でも9.7%の塾にすぎず、概して、歴史に関するものはあまり用いられてない。これは、歴史が直接日常生活に必要とされないからであろう。地理科では、やはり、地元東京の地理が日常生活と深い関係のあることから、他の地域の地理より重視されている。そして、「江戸」ではなく「東京」と書名につくのは新しいものであるが、それが36.7%もの塾で用いられている。特に、第一番中学区では約半数の塾で用いており、東京の地理への関心が強い。産業科で特に目立つのは『商売往来』であり、教材の中で一番多く使われており、42.9%にも達する。これは、『商売往来』が商人のみに役立つというだけでなく、商品の名が多く示されているということから消費者にも役立つ、使用されたからであろう。女子用のものについては、最も多く挙げられている『女今川』でも3.7%の塾にすぎない。女子用の書籍は、28種類記載されている。また、男子生徒への教授書籍と女子生徒への教授書籍と別記している塾でも、殆ど同じ教材を用いており、概して、女子用書籍以外は男子生徒も女子生徒もほぼ共通の教材を使用していたと解せられる。

第11表を総括すると、消息や教訓・歴史に関するものなど近世からの伝統的な教材が主流ではあるが、『東京方角』や『世界国尽』・『世界商売往来』などの新しい教材も用いられており、近代への過渡期であることが示されている。さらに、新しい教材は特に地理・産業に関するものの中から生じてきているのが特徴である。その他、最も基本的なものとして、『いろは・(イロハ・仮名)』(316塾)、『名頭』(317塾)を挙げている。

漢籍は主に読書用として用いられたが、その主なものは、『四書』(148塾)、『五経』(104)、『孝経』(99)、『三字経』(66)、『小学』(54)、『論語』(42)、『大学』(35)などである。

以上は習字用・読書用の教材でもあるが、洋学や算術などでは教授書籍名を挙げている所が少ない。洋学の場

合、綴字・リードル・文典・会話などの語学学習だけでなく、英国史・米国史などの歴史や地理・究理書・地学・経済学を合わせて教授している所も多い³⁰⁾。

V. 結び——近世から近代へ——

以上、教師・生徒・学習内容の三つの面から寺子屋・私塾における女子就学の実態を見てきたのであるが、全体を通して言えることは、近世からの継続面と近代の新しい面とが混在していると言うことである。殆どが近世からの継続面であるけれども、その中に少しづつではあるが、近代の新しい面が生じてきている。新しい面とは、女子の中でも洋学塾で学ぶ者が生じてきたこと。そして、僅かではあるが、女子のための洋学塾も開かれるようになったこと。また、教材においても殆どが近世から用いられていたものであるが、地理や産業の中で世界を題材とした新しい書籍が用いられるようになったことなどである。これらの新しい面は、旧士族や農業従事者の多い地域よりも政治文化の中心地、商業地から芽ばえてきているのが注目される。

また、寺子屋においては女子の就学数が男子の就学数に迫っていることや、殆どが男女共学³¹⁾であったことなど、すでに、近世の中に近代へ移行していく面があったとも言える。そうして、このような男女共学の教育は近代の小学校に継続していく一面でもあろう。女子も教育機関において学ぶという習慣が、すでに高まっていたということに意義がある。

まさに、この明治の初期は、近世から近代への過渡期であり、政府による上からの近代化と共に、従来、自然発生的であった庶民の教育機関においても近代への萌芽が生じつつあったことを痛切に感じる。(なお、このことは東京府の場合であって、全国レベルでの考察ではない。)

註

- 1) 「学制」の序文にあたる「被仰出書」の中で「……自今以後一般ノ人民(華士族農工商及婦女子)必ス邑ニ不学ノ戸ナク家ニ不学ノ人ナカラシメン事ヲ期ス……」とある。
- 2) 深谷昌志著『良妻賢母主義の教育』昭43, 33頁, 34頁。『日本教育史資料』からの算出により、男子100に対する女子の寺子屋進学率は全国的にみて東京が88.7%と最も高く、次いで京都74.4%, 大阪53.4%と続く。一般的に都市及び都市近郊の進学率が高く、東北・九州・四国などの進学率は低い。
- 3) 明治3年12月の太政官布告(『太政官日誌』明治3年第66号)において、初めて、「諸技藝師家私塾」に対し、開業には地方官の許可が必要であるとされた。

その後も明治4年9月・11月の文部省布達、明治5年3月の文部省布達第6号(『文部省布達全書』明治4・5年)でさらに届出を強化し、政府の統制下に入れた。

- 4) 明治5年3月の文部省布達第6号によると、私学・家塾について「…但府縣学之外皆私学トス。唯一家或ハ一家迄之子弟ヲ教授者ハ家塾ニ属シ候間…」としていたが、明治5年8月の「学制」では、私学は官立学校に対応するものであり、私塾は教師の免状を持ったものが自宅で生徒を教授する場合であり、家塾は教師の免状を持っていない者が自宅で生徒を教授する場合であるとした。『東京府開学明細書』第1巻22頁。「学制」第23・28・30・32章参照。
- 5) 文部省布達第25号・第27号(明治5年9月)、文部省布達第30号・第34号(明治5年10月)『文部省布達全書』明治4・5年、参照。
- 6) 東京都編『区制沿革』都市紀要3、昭5、108頁、また六大区の他に若干の地域が加えられた。それは、品川口郷村四小区(第二番中学区)、内藤新宿口八小区(第三番中学区)、板橋口郷村一区(第四番中学区)、千住口郷村三区(第五番中学区)、葛飾郡三区(第六番中学区)である。
- 7) 東京都教育研究所編『東京教育史資料大系』第1巻・昭46、221頁。
- 8) 南和男著『幕末江戸社会の研究』昭53、7頁、8頁、明治5年六大区の職業分類比。
- 9) 同前、6頁、江戸では町方住民を地主(家持)、家守(家主)、地借、店借の四階層とし、店借率が高いことは都市の下層民が多いことを示す。
- 10) 同前、9頁
- 11) 『東京府開学明細書』第1巻、40頁、43頁。
- 12) 行書、楷書、草書、八分、篆書、唐詩文章などを教授書籍とする所謂書道塾(学科は筆道と記載されている)や、「筆道・支那学(漢学)」と記載するものもここに含めた。
- 13) 記録の中には、生徒の性別や年齢区分、教授書籍などが無記入のものもあるが、これらについては、統計をできるだけ正確にするため、やむを得ず割愛した。
- 14) 塾の開業年代・規模・分布・塾主の年齢などの分析については、名倉英三郎著『近代日本教育制度の発達——明治初期における東京の塾の発達』比較文化研究所紀要第10巻(昭35)に詳記されているので、本稿では、これらの分析は割愛する。
- 15) 本稿資料の『東京府開学明細書』(明治六年一月)には、計1,000塾が集録されている。本稿で「塾」とのみ記載する場合は、寺子屋と私塾の分類にかかわらず、両方を指すものとする。
- 16) 第五番中学区の春幡家塾である。塾主は奥原晴湖(女)で、学科は支那書画である。教授書籍は四書・五経・史類と記載されており、特に女子用というものでもない。生徒は10~13才女1人、14~16才女1人、17才以上女1人で総計女3人である。生徒が

女子のみであるとしても、極めて少数であり、たまたま男子生徒がいなかった場合とも考えられ、女子専用塾とは断定し難い。

- 17) 男女共学塾とは、男子生徒も女子生徒も学んでいる塾という意味であり、必ずしも男女同席とは言えない。乙竹岩造著『日本庶民教育史』下巻、昭4、1090頁参照。
- 18) 「商」、「雑業」と記載されているものも「平民」に含める。
- 19) 註2)参照。
- 20) 寺子屋で19才以上の男子生徒数が多くなっているのは、所謂書道塾や程度の高い漢籍をも合わせ教授している塾があるためである。
- 21) 学科目を漢学・支那学・皇学などと記してある塾で、教授書籍で言えば、漢学塾は、四書・五経・蒙求・十八史略・元明史略・春秋左氏伝などである。皇学塾は、古事記・日本書紀・国史略などである。分類上、漢学塾と皇学塾に分けてもよいが、漢学と皇学の両方を教授する塾が多いため、また、洋学塾に対照させる意味もあって、所謂和漢学として漢学塾と皇学塾を一緒の系列にした。
- 22) 算術の塾とは、学科として算術のみを記載している塾で、学習内容を八算の他に開平・開立・天元・幾何学・測量などとしている。
- 23) その他としては、法学と農学を教授している第二番中学区の迎曦塾(女子生徒は6人)と、支那学と医学を学科とする第六番中学区の通義社(女子生徒は2人)の2塾がある。
- 24) 名倉英三郎著の前掲書、19頁第4表参照。洋学系列の塾(143塾)の内、明治以前に開業したのは4塾のみである。しかも、この4塾には女子生徒はいない。女子生徒の学んでいる洋学塾はすべて明治以降の開業である。
- 25) 洋学のみ塾のうち、英学が13塾(女子生徒100人)、独学が3塾(4人)、仏学が1塾(2人)である。
- 26) 東京都政史料館編『東京の英学』(都市紀要18)・昭34。『東京府開学明細書』には記載されていないが、明治6年までに開業された東京の女学校は、ミッション系のA六番女学校、B番女学校と官設の東京女学校、開拓使女学校と上田駿による上田女学校とがある。これらは英学を主としていた。
- 27) 女子生徒が記載されている塾(洋学・算術以外)で教授書籍を記載してないのは除く。調査塾数750塾。
- 28) 石川謙・石川松太郎編『日本教科書体系』第1巻~15巻・別冊・別冊II(昭42~昭52)。
- 29) 教授書籍名を挙げずに、「往來物類」とか「諸往來物」とだけ記している塾もあり、第11表の往來物の使用数はさらに多いと思われる。
- 30) 算術については註22を参照。
- 31) 『東京府開学明細書』の塾を寺子屋と私塾に分類した場合、総寺子屋数の内、男女共学の寺小屋が96.2%を占め、男子生徒のみの寺子屋は3.5%、女子生徒のみの寺子屋はない。